

とまった
雨曳車



文花岡大学
之・前田晃宏

たんぼをつきぬけ、くぬぎばやしをつきぬけ、きれいなクリームいろの電車は、あかるい、おひるすぎのひかりのなかを、すべるように、はしっていった。



目のすぐそばに、大きなほくろがあつて、いつもわらつているような顔つきをしてようにみえる、ふとつた運転手が、ハンドルをにぎり、まっすぐにまえを向いて、その電車を運転していた。



すると、とつぜん、運転手は、
だれにもききとれないような、小
さなこえで、

「あっ！」

とさけぶなり、いきなり、ブレー
キをかけた。

電車は、ガタン、ガクンと、大
きくゆれて、とまった。



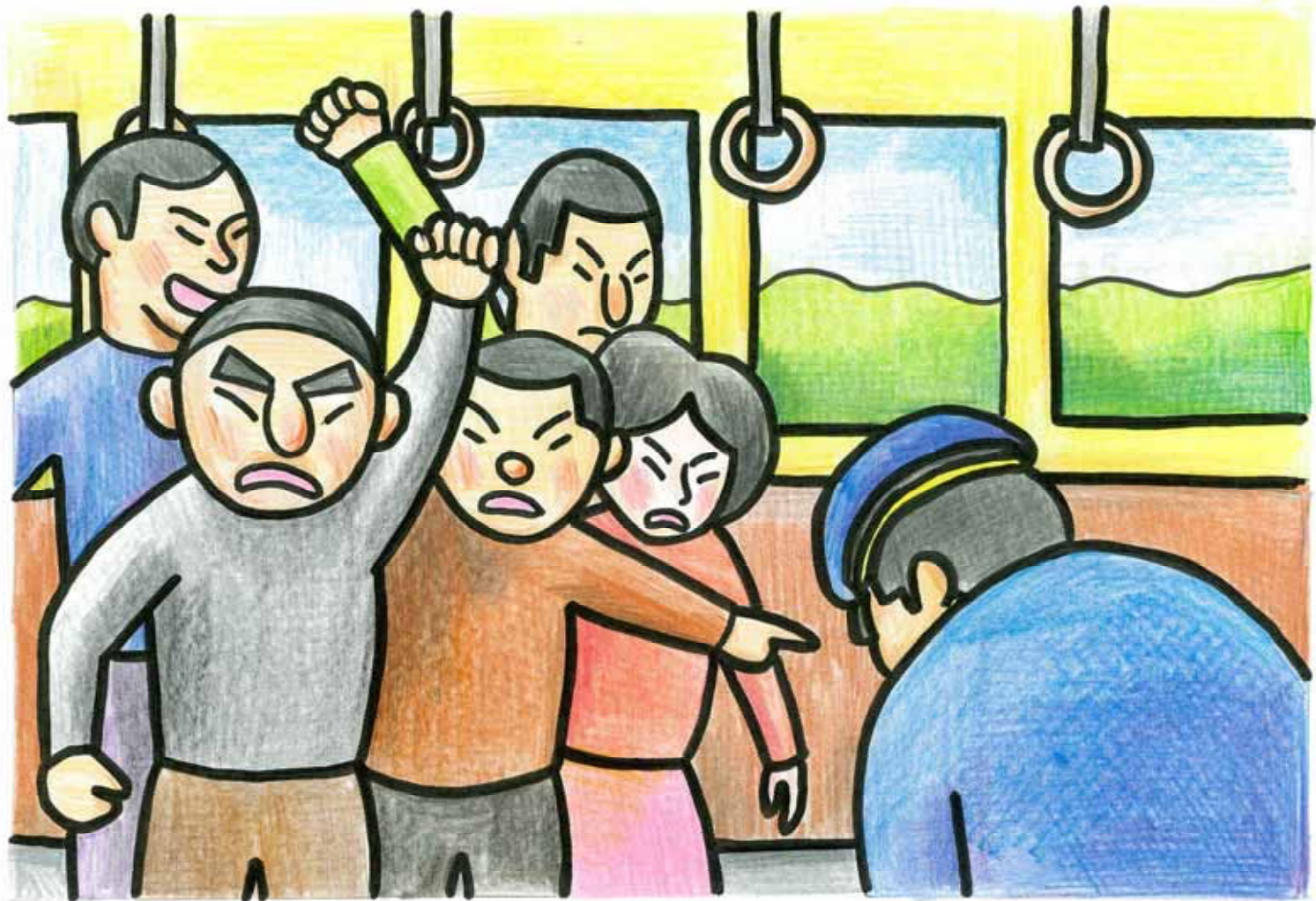
それで、なかに乗っていた人たちは、いつきに、まえのほうへのめり、はげしく、からだをぶっつけあい、なかには、ころんだ人もいた。



みんなは、「ちえっ！、運転手のやつ、いねむりでもしていたのにちがいない」といって、ぶりぶりおこりだした。

「きをつける、へたつくそな運転をするな」

「ねぼすけ運転手のばかやろう」
運転手は、いねむりをしていたのではなかった。



だが、運転手は、みんなのほうをふりむくと、電車をとめたいいわけは、なにもしないので、ただ、「すみません、すみません」といって、ていねいにあやまった。

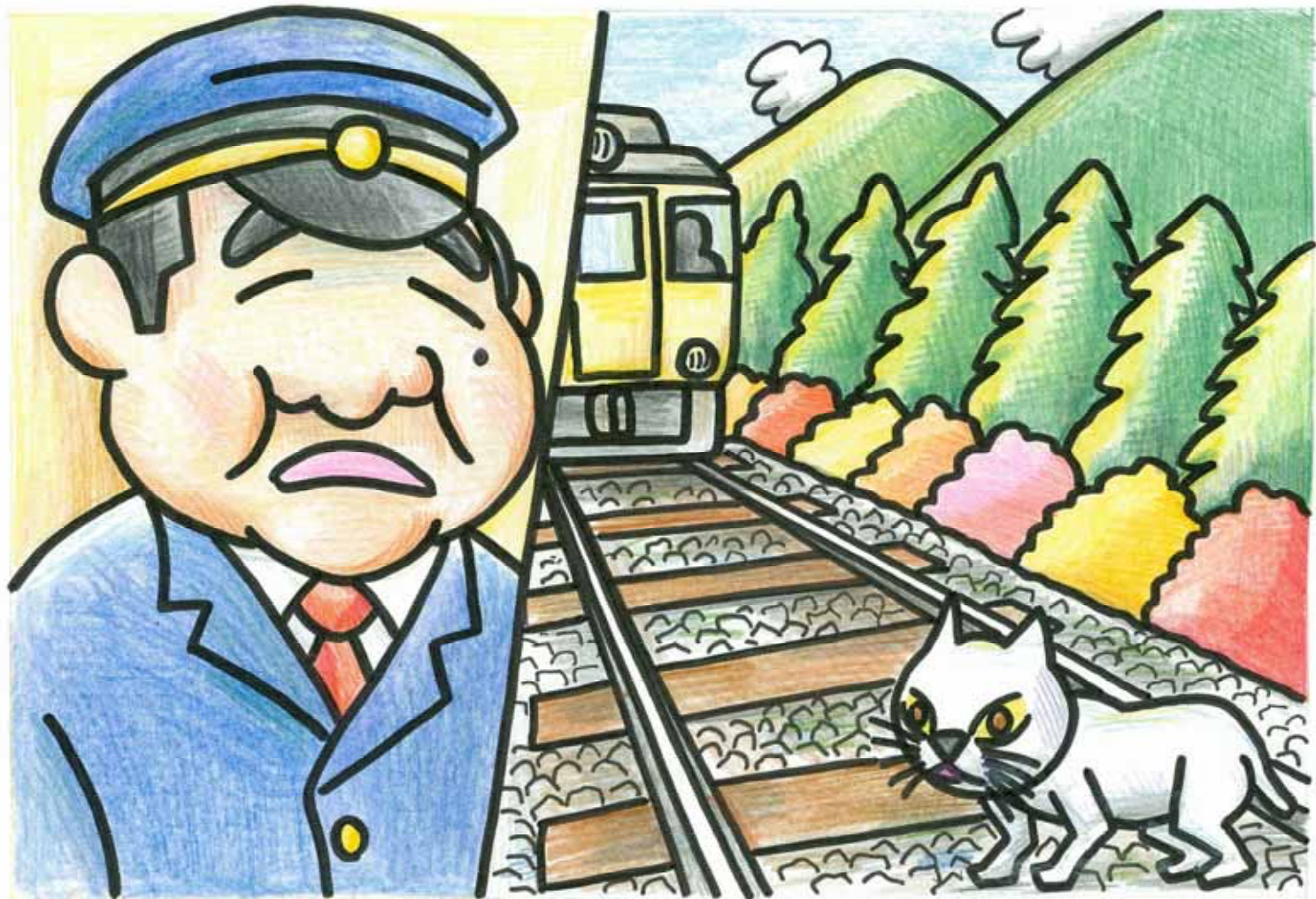
そして、むきなおると、まっすぐまえをむいて、しずかに電車をうごかしはじめた。

運転手が電車をとめたのは、せんろをよこぎろうつとするちいさなねこのこを、ひきこるすまいとしたからであつた。

ひきこるすまいとおもつたのは、運転手のじぶんかつてな、かんがえからである。

だから、そのことが、みんなから、どんなにどなりつけられてもしかたがないと、運転手はおもった。

運転手は、おきゃくさまをおこらせたことを、ほんとにこころから、すまないとおもっていた。



だが、そう思いながらも、運転手は、こころのかたすみほついで、そつと、ほんのそつと、

「よかった、よかった、ひきころさずにすんで、ほんとに、よかったです」

と、ひとりごとを、いわずにいらねなかった。

すると、ははねいにおくねて、よちよちとした、かわいいかっこついで、せんろをよじぎっていった。



まっしろなこねこのすがたや、
それから、たすかったおやこのね
こが、青いくさのつえにねそべり、
たのしそうにあそんでいるすがた
や、それから、ははねこのちぶさ
におしっくらしながらすがりつ
いて、きれいにすんだ目をみはっ
て、こくん、こくんとのをなら
して、おちちをのんでいるこねこ
たちのようすまでが、はつきりと、
みえるような気がして、運転手は、
ひとりでに、にっこりとわらえて

くるのであった。

「もう二どど、おきゃくさまをお
こらせたり、きぶんをわるくさせ
るようなことが、あつてはならな
い。よく気をつけよう」



そうではなくてさえ、いつもわら
っているようにみえる、ふとつた
運転手は、にっこりとわらえてく
るかおを、まっすぐまえにむけ、
かたくハンドルをにぎりしめなが
ら、たんぼをつきぬけ、すべるよ
うにじょうずに、電車をはしらせ
ていった。

